

それから親狼は後ろに向き直って洞穴の中にある金藏さを外に連れだした。そしてゆっくり金藏さを開墾場まで送ってきた。その時金藏さは、はじめて親狼の後足が傷ついて不自由だったことに気がつき、深くうなづいていた。

送ってきた親狼が山に帰ろうとした時、金藏さは腰の手ぬぐいを引きぬいて切り株の上に立った。そして頭の上でそれを精いっぱいふった。

山にはもう、夕日が赤かった。

これにこたえるように山からも、狼の長く尾を引く一声があった。

横井 登

# 牛 岩



むかし、多治見の大原村に与助という正直な牛引きがいた。

ひとりものころは、かわらを積んで牛に引かせていたが、よめのとよをもらってからは、運上金をとどけるように、役人からおおせつかるようになった。

「与助ならまちがいをおこすまい。」

「与助にたのめばすぐひきうけてくれる。」

まじめでよく働く与助は、役人からも村の人からもたいそう信頼されていた。

ある年、この大原村へ金太というかわら師がながれてきた。そのころ、大原村にかわら屋が二十けんちかくあり、かわらのかたちも焼き方もみんな三河と同じだった。彦右衛門という人が三河から、かわらの焼き方をおぼえてきたのがはじまりで、三河とのいききもわりあい多かった。

金太は、大原村に身寄りもなかったし、金太のふるまいやことばつきから、ならず者だとすぐわかった。それで大原の人たちはだれも近づかなかったが、与助と、とよだけは、なにくれとなくめんどろをみてやっていた。金がほしいといえば、さいふをほたいいくらかの金を貸してやったり、食うものがないといえは、少しぐらいのところはわけてやったりした。

ところが、だんだん日がたつにつれて、金太もこの大原におりづらくなってしまった。大原へくる前に、人の金を盗んだり、ゆすりをはたらいたりしていたことが村の人に知れ、そのうわさが金太の耳へはいつてくるようになった。

金太は、いよいよこの土地をはなれようと思いたったが、手もとに金がなかった。金太は与助に金を借り、そのまま大原から逃げようと、ある晩、与助の家へいった。

ところが、与助には、あいにく貸すだけの金を持ち合わせていなかった。

「すまんが、いま、それだけの金をもっておらんじゃ。少しよぶんに働けば、それくらいのお金はすぐとれるに。」

与助と、とよにことわられた金太は、ほかにたのむ者もないから、しかたなく家へ帰っていった。

その次の日の朝のことである。

とよは、七つに起きて牛にえさをやった。

「うんと食って、まちがいのうとどけてくるんじゃぞ。」

とよは運上金を運ぶたびにそういつてじゅんびするのだった。

ところが、その日の朝にかぎって牛のようすがいつもとちがう。とよが、えさをむけてもいっように食べようとしない。とよは、

「さ、おそうなるといかん。どうしたんじや。」

心配して背中をなでてやるが、牛は顔をそむけてぜんぜん食べようとしない。

与助はしかたなく運上金を牛に積んで出かけようとするが、いくらさしずをしても動こうとしない。与助もとよも

「おかしなことじや。」

と首をかしげたが、とどけなければおとがめをうけねばならない。

めったにおこったことのない与助も、

「これっ、なにしとるんじや。」

そういつてたいたり、鼻環をむりやりひっぱったりしてつれていった。

とよは、いつもとちがう牛のようすが気になって、与助と牛が見えなくなるまで、街道へ出て見送っていた。

それから、とよは家の中へはいつたが、どういふことか頭がずきんずきんと痛むので、ねどこへはいつてふとんをかぶった。そのうちに、ねるともなくねむってしまった。

すると、ゆめの中で老人の低い声がきこえてくる。

「いますぐ高根山のふもとまでいけ。塩をもって、いますぐでかけよ。」

とよは、びっくりしてとび起き、高根山のふもとへ走っていった。すると、御嵩村へぬけるせ

まい林の中の街道で、与助も牛もぼさり切られて死んでいた。殺された牛は、首と胴がまっぶたつに切られてそのまま岩になり、与助をかばうようにふしていた。とよはあまりのできごとに声も出ず、塩をそなえて泣きふした。

その日から、大原村の人で金太のすがたを見た人はひとりもなかった。

与助と牛が殺されたこのほらを、大原の人たちは「牛がほら」とよび、この岩におまいりするようになった。

また、頭の痛む人や、うし年の人は遠くからもやってきて、塩をそなえておまいりするようになった。

奥村 幸夫